



星空紀行

～銀河鉄道の夜汽車に乗って～

2016年02月02日

賢治、再び石へ向かう (1)～(8)

(1)

下根子（現岩手県花巻市桜町）の羅須地人協会は閉じざるを得ず、実家に戻って病床に伏していた賢治にとって、その毎日はさぞかし苦しかったに違いない。なにしろ、自らの理想を追求してはつまずく経験は、これが二度目と言えるからだ。一度目は、なかば家出同然で上京し、国柱会の門を叩き、宗教の道を全うせんと理想に燃えた後、その同じ道を進むべき同志を失った時である。その後、失意の中で帰郷した賢治は、稗貫農学校の教師となり、充実した生活を送っていたといえるだろう。しかし、その教師生活を投げ捨てて、羅須地人協会を立ち上げ、農民のための理想を掲げて、走り回った自らの行動は実を結ぶどころか、自らの体もぼろぼろにしてしまった。理想を求めすぎ、バランスを欠いた行動を悔いる念にもさいなまれたのではないだろうか。賢治が、自らの羅須地人協会の試みに対して、かなり後悔していたことは、多くの研究者も認めるところだ。実際、下根子の賢治の近くに住んでいた知人の伊藤忠一に宛てた手紙が残されている。やや体調が回復した1930年（昭和5年）に書かれた手紙には、

「（前略）たびたび失礼なことも言ひましたが、殆んどあすこでははじめからおしまひまで病氣（こころもからだも）みたいなもので何とも済みませんでした」

と記されており、その文面からは「あすこ」すなわち下根子の生活を肯定しているとは到底思えない。さらに、興味深いのは、「禁治産」というタイトルで、おそらく戯曲のアイデアを書いたメモが見つまっていることだ。そこには「小ブルジョアの長男」が設定され、

「空想的に農村を救わんとして奉職せる農学校を退き村にて掘立小屋を作り開墾に従う。借財によ

りて労農芸術学校を建てんという。父と争う、互に下らず子ついに去る。」

とある。労農芸術学校のところは、前回は紹介したように、結婚を考えた伊藤チエの兄、伊藤七雄の影響も有ると思われるが、農学校を退き、堀立小屋を作るところなどは、紛れもなく賢治自身がモデルであり、基本的には羅須地人協会の試みと考えて良い。なにしろ、父と争うところは、まさに賢治である。

そんな後悔の病床にあった賢治に再び思いがけない光明が差し込んだのは、1929年（昭和4年）のことであった。賢治の弟である宮沢清六氏の著書「兄のトランク」の一節に、その様子が描写されている。

「朴訥そうな人が私の店に来て病床の兄に会いたいというので二階に通したが、この人は鈴木東蔵という方で、石灰岩を粉碎して肥料をつくる東北砕石工場主であった。兄はこの人と話しているうちに、全くこの人が好きになってしまったのであった。しかもこの人の工場は、かねて賢治の考えていた土地の改良には是非必要で、農村に安くて大事な肥料を供給することが出来るし、工場でも注文が少なくて困っているということで、どうしても手伝ってやりたくて致し方なくなった。」

もともと賢治は家族から「石っこ賢さん」と呼ばれていたほど、石好きの理科少年だった。そして、この病床時の出会いこそが、賢治を再び石へと向かわせるきっかけとなった。

釣り好きは「鮎に始まり鮎に終わる」と言われている。天文好きの間でも、実は「月に始まり、月に終わる」という喩えもある。そして、この出会いが「石に始まり、石に終わる」という賢治の人生の最終章の幕開けとなる。

(2)

実家で病床に伏していた賢治に光明が差したのが1929年（昭和4年）の春のことだった。まだそれほど回復していない賢治の元を、鈴木東蔵という人物が尋ねてきたのである。

鈴木東蔵は、岩手県の南部、東磐井郡（現在の一関市）に東北採石工場を建てて、石灰肥料を生産する事業を行っている人物だった。そもそも、東蔵が工場を始めたきっかけは、大規模農業の走りでもあった小岩井農場の存在にある。小岩井農場は、もともと火山灰地で耕作には適さない荒れ地を開拓した場所である。岩手山麓の広大な官有地を開墾し、農業を始めようと内閣鉄道局長官であった井上勝が、日本鉄道会社副社長だった小野義真および三菱社の岩崎彌之助に呼びかけたところから始まったものであることは広く知られている（そのために、三人の姓の頭文字が農場名となっている）。

開拓直後から、牛や馬の飼料の自給をめざして、牧草が育つための土壌改良が必要となった。その一環でとられた対策のひとつが、酸性土壌を中和する石灰の使用である。当初は消石灰が使用されたが、アメリカ方式として石灰石を細粉にして蒔く方法が検討された。ある程度の粒径をもつことで、効果が持続するからである。この細粉石灰石の入手が困難で、石灰工場の屑石などを買入れて用いたり、あるいは農場そのもので細粉設備を設けようとしていたりした。

そこに技師補として勤めていたのが、川村貞助（旧姓・鈴木）という人物で、その実の兄が鈴木貞三郎といい、鈴木東蔵の叔父にあたる。石灰の必要性を聞いた東蔵は、当時、開通間近である大船渡線による輸送も見通し、貞三郎と共に東北採石工場を立ち上げるに至ったわけである。これにより、小岩井農場は、希望通りの細粉石灰を入手できるようになったのである。

ところが、小岩井農場に納めるだけでは工場が成り立たない。他の鉱物資源なども扱いながら、なんとか主力の石灰の需要を増やそうとしていた。しかし、当時の農家にそれほど余裕はなかった。石灰などは必要なら、自分で山に入って取ってくれば良い、買うものでもないし、冷害続きの東北の農家は買う余裕もそれほどなかった。そんな頃、花巻の渡嘉肥料店からは、毎年貨車にして2台分ほど

の注文が入っていたという。ところが昭和4年になって、注文が途絶えてしまったという。不思議に思った東蔵が花巻に出向き、事情を聞いたところ、宮澤賢治という人物が、これまで肥料設計の世話をしていたために、石灰が売れたのだが、今病気で休んでいるためである、と知る事になる。

なにしろ、賢治は農業化学と肥料を学び、石灰の重要性をいち早く認識し、教師時代には、それを授業で教えていた人物である。羅須地人協会時代を通じて、多くの農家から無料で肥料相談を受け、設計書を書いていたが、当然ながら土壌改良・酸性度の中和のために石灰は必須であった。多くの資料設計書に石灰岩抹（現在は炭酸石灰・タンカルと呼ぶ）を勧めていたのである。その意味で、知らず知らずのうちに賢治は、東蔵の工場で生産される石灰肥料の普及に携わっていたことになる。肥料の神様となっていた賢治が病気で休むと、売れなくなったというのは当然のことだった。

昭和4年春には病状もよくないために面会謝絶の状態だったが、東蔵がどうしてもというので賢治と話をするや、両者が石灰を通じて気を通じるのは、ごく自然の成り行きであったといえるだろう。しかし、それ以上に話が弾んだと推測される。実は東蔵は、石灰工場を立ち上げる前から、賢治と同じ東北の農民の生活向上のために奔走していたからだ。もともと東蔵は村役場の書記として15年ほど勤めている。その間に青年活動のリーダーとして実質を積んでいくだけでなく、当時の社会情勢の分析をもとに東北農村の実情を解決すべく「農村救済の理論及び実際」、「理想郷の創造」という提言をまとめた著書まで出版しているほどだ。役場を辞めてからは上京して、雑誌記者をしつつ、「地方自治文化的改造」を著している。この3冊の著書には、自らの地方行政経験を元にした農村社会を救うための気持ちが込められている。このような思想を持つ二人が意気投合しないわけではない。賢治と東蔵、どちらもアプローチは違ったが、最終的に石灰という具体的な肥料を通して運命的に出会ったといえるだろう。

賢治は、病床の中にあいつつも、農家を助けたい思いで、石灰の普及にさらに取り組みたい気持ちが強くなっていく。そして、事業があまりはかばかしくなかった東蔵の方は、“肥料の神様”とまで言われていた賢治の知識や智慧にすがりつきたい思いを隠すことはできなかった。この面会后、両者は手紙による意見交換で、より親しくなっていくのである。

(3)

鈴木東蔵の訪問は、病に伏していた賢治を、ある意味で前向きにさせた出来事だった。東北の農家を助けたいという思いを持ち、そして偶然にもその形は異なるものの、「石灰肥料」の普及に携わっていた両者の出会いは大きかった。賢治にとっては、実家を飛び出してまでつくった「羅須地人協会」が、いわば失敗に終わったこともあって、病だけで無く精神的にも落ち込んでいた時期でもあった。

その後、両者は手紙による意見交換を始める。東蔵は、“肥料の神様”といわれた賢治と面会后、さっそく自ら石灰肥料の効果をうたった広告を作り始めようとした。ところが、一度きりの面会で、すべての知識が伝授されることはない。おそらく東蔵には、どうしても曖昧な部分や、さらに正確さを期したい気持ちがあったに違いない。面会の年の冬、昭和4年11月と12月にわたって、石灰肥料の効用について両者の間で書簡が交わされている。東蔵が賢治に教えるを乞うていたわけだ。特に東蔵が作成した「石灰石粉の効果」の広告文案について、賢治はその内容の間違いを訂正した上で、懇切丁寧にさまざまな情報を盛り込んでいる。

こうしたやりとりを通じて、賢治はますます東蔵が経営する東北採石工場を助けたくなっていたと思われる。賢治の弟である宮澤清六氏の「兄のトランク」にも

「しかもこの人の工場は、かねて賢治の考えていた土地の改良には是非必要で、農村に安くて大事な肥料を供給することが出来るし、工場でも注文が少なくて困っているということで、どうしても手伝ってやりたくて致し方なくなった。」

とある。昭和5年はじめに東蔵に送られてきた賢治の手紙が、それを如実に裏付けている。その手紙こそ「貴工場に対する献策」である。それまでは東蔵が疑問に思ったり、指導を受けたりするために賢治に送った手紙の返書という形でしかやりとりはなかったのだが、この献策は賢治が自発的に書き送ったものだった。この献策は、実に目を見張るものがあった。一介の文学青年が書いたものとは思えないほど、多彩な経営戦略が述べられているのだ。経営の戦略立案の重要性を説き、販路開拓、鉄道の利用、競争を見越した宣伝広告だけでなく、石灰肥料そのものの品質管理や多角化まで含まれている。

その中でとりわけ特筆すべきは、工場の取り扱う石灰肥料の商品名の変更であった。それまで工場では石灰肥料を「石灰岩抹」あるいは「石灰岩粉」などと呼んでいたが、これを「炭酸石灰」とすることを提案した。

「所謂薬用の沈降炭酸石灰の少々粗なるものという風の感じでどこか肥料としては貴重なものでもあり、効き目もあるといふ心持ちがいたします」

賢治らしい感性からの提案だったといえるだろう。実際、東蔵はこれをうけて、商品名を「炭酸石灰」と改め、その後「炭酸カルシウム」、つまりいわゆる「タンカル」となっていった。いまでもこの呼称は広く使われている。また、当の東北採石工場は「タンカル工場」となって発展していくわけである。

このような手紙のやりとりを通じて恩義を受けた東蔵は、そのお礼のために賢治の実家を再度、訪問する。両者の出会いから約1年後、昭和5年の春のことだった。

(4)

鈴木東蔵が病に伏していた賢治を訪問した後、何度かの手紙のやりとりを重ねて、両者の気持ちはますます近づいていった。そして、東蔵が、そのお礼のために賢治の実家を再度訪問したのが昭和5年の春であった。折しも、長い静養を経て、賢治の体調が回復しつつある時期で、賢治はその後も手紙を通じて、工場のために働きたいとの希望を述べるようになる。昭和6年の1月になると、東蔵は再び賢治宅を訪問し、おそらく賢治の父も交えて話し合った上で、工場の技師として賢治を雇う決心をする。

「その工場のために働く決心を固め、昭和六年の春から、その東北採石工場の技師として懸命に活動をはじめた」（「兄のトランク」宮澤清六著）

この雇用契約については、賢治の父・政次郎の役割が大きかった。もともと若いときから父のことを全く聞かずに、家出同然に上京したり、あるいはせっかくの教師の職もなげうって、羅須地人協会などという理想に走った挙げ句に病魔に倒れてしまったわけだから、そろそろ地に足がついた生活を望んでいても不思議はないだろう。人生経験も事業の感覚も身につけていた政次郎は、東北採石工場の技師として賢治が明確に位置づけられるため、そして給与を支払ってもらえるために手助けした。当時、なかなか資金繰りにも困っていた東蔵に対して、政次郎は500円（*）という大金を工場経営基盤として貸すこと、さらに製品の発送に際しての必要な経費も貸すことを申し出たのである。これは東蔵にとっては、この上ない援助だった。後に東蔵は回想録で「工場について五円の都合も出来ぬ私に、五百円とは大きかった」と述べている。父、政次郎の賢治に対する思いが、具体的な行動に表れているといつてよい。

ところで、賢治は技師として東北採石工場に赴いたわけではない。さすがに体調が回復しつつあったとはいえ、まだ不安は父にもあったのだろう。しばらくは東北採石工場花巻出張所勤務、すなわち賢治の実家を出張所と称し、広告文などの作成や炭酸石灰に関する調査・改良、質問に対する回答、

および小岩井農場などを除く岩手、秋田、青森、山形への販売を扱うことなどが仕事として課されることとなった。その意味では、いわば在宅勤務のようなものとも解釈できる契約になっていた。もともと広告文の作成や質問への回答などは手紙を通じてすでに行っていたことだったし、販売についても出張所である実家で事務仕事をこなせば、売り上げを伸ばそうとしない限りは、なんら問題はないはずに見える。おそらく、この契約を東蔵と交渉して作成したのは父・政次郎だろう。賢治に負担をかけず、しかも実家で仕事ができるような形で、地に足がついた生活をさせようと思ったのではないだろうか。

ところが、その父の思いとは裏腹に、賢治は東奔西走することになってしまう。なにしろ、元来が当時困窮を極めていた農家のために、炭酸石灰肥料を薦めていた賢治のことだ。この契約によって、賢治の思いに火がついてしまったといえるだろう。この契約がなされたのは昭和6年2月21日だったが、契約成立を待ちかねたように賢治は各地を転々として、売り込みをはじめるのである。猛烈セールスマン賢治の誕生である。

*：日本銀行・企業物価戦前基準指数によれば、昭和5年を1とすると、平成26年は約830に相当。つまり40万円以上を貸したことになる。

(5)

賢治の父のはからいで、「東北採石工場花巻出張所」、すなわち実家を勤務地とする技師となった賢治は、体調の回復もあって、猛然と炭酸石灰肥料のセールスに東奔西走しはじめた。昭和6年2月21日の雇用契約成立後、翌日には盛岡へ、その翌日には稗貫郡湯口村へ、さらに24日には工場のある松川へ出かけている。

スタートダッシュとは、まさにこのことだろう。3月になっても賢治の行動は勢いを増しこそすれ、衰えることはなかった。雪が消え、石灰を蒔いて土づくりに絶好の季節に重なったことも一因である。4月には、岩手県にとどまらず、仙台や秋田などへも足を運び、その疲れがたまって、しばしば病に伏すほどだった。

実際5月の半ばには10日ほど床に臥せていた。その後、石灰の方が需要期を過ぎてぱったりと売れなくなるや、賢治は精米のために石灰を用いることで需要を拡大しようとしたり、あるいは松川近くで算出する大理石などを用いて壁などの建築材料にして、多角化を提案していったりした。もともと幼少時から「石っこ賢さん」と呼ばれたほど岩石に詳しい賢治である。国柱会へと飛び出す前には、家業として建材や大理石の売買を父に提案したこともあり、アイデアはもともと持っていたのだ。そして、これは自分の仕事と思ったのか、そのセールスにかかる費用を時には自腹で払うなどしていたのである。

こうして石に再び向き合った賢治だったが、世の中は厳しかった。この頃、賢治が使っていた「王冠印手帳」が残されているが、そこには石灰肥料の需要予測や原価計算などの数値に加えて、その頃に思い描いた詩の原稿などが走り書きされていて、賢治の行動や心境を知る貴重な資料となっている。特に、興味深いのは慣れないセールスマンとして働く賢治の心の動きである。「十貫二十五銭にては 引き合はずなど」などといった採算を思うフレーズがしばしば登場する。その一方で、「ぐたぐれの外套を着て考ふことは 心よりも物よりも わがおちぶれしかぎりならずや」といった言葉も走り書きされている。（これらの原稿は、後に手を入れられて、かなり異なる言葉で原稿用紙に書かれることになる）

そして、その後に「あらたなる よきみちを得しといふことは ただあらたなる なやみのみちを得しといふのみ」という走り書きにつながっていく。ちなみに、このフレーズは元東北採石工場跡地に詩碑として建立されている。

東蔵との出会いをきっかけに、新しく農民のために思って働き出した賢治。汽車を乗り継ぎ、慣れないセールスに東奔西走していくうち、商売という全く未体験の世界の厳しさに直面して悩む心境が、そこには現れているといえるだろう。疲れた体で汽車を待つホームで、あるいは汽車に揺られな

がら車窓を眺め、そんな心情を折々に綴ったに違いない。そして手帳の行動記録から察するに、夜汽車に乗ることもしばしばだったろう。その車窓からは、点々とだが数少ない街明かりと共に、星空も見えていたかもしれない。もちろん、星空を眺めた記録こそないが、そういった夜汽車からの風景は、最終的に「銀河鉄道の夜」につながる部分はなかったとはいえないだろう。もともと銀河鉄道の夜の原型は、だいぶ前、教師時代にはできあがっており、その一部は「シグナルとシグナレス」

(*) などの話の一部が現れているが、セールスに奔走している時期が賢治にとっての人生で最も汽車と密接な時期であったことは間違いない。

夏に壁材のサンプルを実家で作くりあげた賢治は、今度はそれをもってセールスに向かう。壁材を抱えて東京へ向かい、その逗留先で病に倒れ、帰郷したのはその年の9月27日のことであった。

* 「シグナルとシグナレス」については、本稿「教師時代の作品群（5）」に詳しい

(6)

東北採石工場の技師となってからというもの、賢治は猛烈な勢いで東奔西走した。それは自らの信念に基づいていたとあってよい。石灰肥料を通じて農村を豊かにしたいという思いだ。そして、それは工場の経営を成り立たせることが前提となる。工場経営は苦しかった。そこで、賢治は炭酸石灰肥料だけでなく、当地で産出する大理石などを元にした新しい壁材を自ら開発し、多角化を試みた。数十キロにもなる、重い壁材のサンプルを抱えて、東京へ向かったのは、昭和6年9月19日のことだった。

しかし、このときすでに賢治は相当疲れていた。11日から16日まで、盛岡で開催される肥料博覧会への出展・設営・展示装飾などを一手に引き受け、自ら宣伝チラシを来場者に配るなどしていたからだ。このとき出店スペースの確保を取りはからった岩手県農業試験場の技師の話では、展覧会で早朝から賢治が宣伝パンフレットを人々に配りながら、熱心に説明する末に、疲れ果てている姿をみて、「むりをなさないで。なにもそこまでされなくても」と案じたという（「年譜 宮澤賢治伝」堀尾青史著）。

疲れを隠して、工場のために出張しようとする賢治。だが、おそらく母には直感でわかっていた。出発の日、賢治の母イチが何度も行くのをやめるように懇願したのは有名な話である。

上京の途中、仙台で人と会うために一泊したが、その夜は同宿客がうるさく、眠ることができなかったようだ。早朝4時過ぎの汽車で東京へ向かったが、開け放たれた窓から入り込む初秋の冷気が眠り込む賢治の肺を痛めてしまったのだろう。上野に着いたときには高熱で震えが止まらず、タクシーで神田の宿へ向かうと、そのまま寝込んでしまった。そして21日、賢治は死を覚悟し、両親および弟妹宛に遺書を書いた。両親宛の内容は、

「この一生の間どこのどんな子供も受けないやうな厚いご恩をいたゞきながら、いつも我慢でお心に背きたうたうこんなことになりました。今生で万分一もついにお返しできませんでしたご恩はきっと次の生又その次の生でご報じたいとそれのみを念願いたします。

どうかご信仰といふのではなくてもお題目で私をお呼びください。そのお題目で絶えずおわび申しあげお答へいたします。」

その遺書は大事に手帳にはさんでいたようである。

数日すると熱は少し下がる気配があったが、とてもセールスに回れる状況ではない。しかし、なんとか工場のために売り込みたい、との思いが交錯したのだろう。宿へ見舞いに来た知人が、どうしても帰りたくない、という賢治の言を「東京に住む気なのだ」と、いささか早計に解釈し、東京付近で

住める貸家を探したほどである。

結局、賢治の容態は回復せず、27日になって賢治は父の声を聞きたくなり、電話をしたとされている。驚いた父は、早速知人に連絡を取って、当日の夜10時55分発の夜行列車で帰ることになる。二等寝台車が運良く確保されたようだが、賢治が降りてきたのは三等車だったという。

この夜汽車に揺られながら、いったい賢治は何を思っただろう。かつて人生をともに歩む友と信じていた保阪嘉内との別れの後、妹トシの危篤を理由に同じ汽車に乗って帰った場面だったか。あるいは伊豆大島ではかない女性との別れの後、いささか夢を見つつ帰る汽車の場面だったろうか。あるいは、かつて自らが完成させようとしていた「銀河鉄道の夜」の場面だったろうか。

自宅に戻って伏せった賢治には、机に向かう体力も無く、手紙も口述筆記を頼まざるを得ない状況が続く。しかし、手帳に詩を書き付ける程度の力はあった。

こうして死の床から生まれるのが「雨ニモ負ケズ」である。

(7)

昭和6年9月、重い壁材サンプルを携えて上京の末に、そのまま倒れてしまった賢治。一旦は死を覚悟しながらも、やっとの思いで花巻に帰るや、すでに東北採石工場技師として走り回る体力は残されておらず、そのまま実家で寝込んでしまった。

ただ賢治の思いは、その病床からもあふれでていた。手帳に走り書きをしつつ、その思いを書き留めていた。その手帳が、いわゆる「雨ニモマケズ手帳」と呼ばれているものだ。手帳のあちこちに病気に苦しみ、祈りを捧げる賢治の思いがあふれている。その証拠の「南無妙法蓮華経」と記されているページがそこかしこにある。呼吸ができずに苦しみ、熱にうなされながら、なんとか御仏にすがろうとしていた賢治の思いだったのだろう。そして、その手帳の11月3日、倒れてから約一ヶ月半後のページに、かの「雨ニモマケズ」が記されていた。あまりにも有名な作品故に、あえてここでは解説をしようとは思わないが、病床の賢治が自らの理想像を、それまでの人生の軌跡と重ねながら書き留めた名作であることは間違いないだろう。

その思想は「銀河鉄道の夜」にも見え隠れする自己犠牲的な側面や皆の幸せをいちばんに考えるという賢治らしいものだった。ただ不幸なことに、その思想は、太平洋戦争中には滅私奉公に通じるものとして利用されてしまった。特に

「一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ野菜ヲタベ アラユルコトヲ ジブンヲカンジョウニ入レズニ」のあたりは、質素儉約を謳う当時の政府の方針にぴたりと合致していた。さらに、あろうことか物資不足に悩む戦後の文部省は、GHQの指導の下、国語の教科書に掲載していた「雨ニモマケズ」の上記の一節「一日ニ玄米四合」という部分を「一日ニ玄米三合」と書き換えてしまった。いずれにしろ、戦中戦後を通じて賢治をもっとも有名にした作品なのかもしれない。

そういった不幸なことがなくても、この作品の迫力に圧倒される人は少なくないだろう。その意味で戦後になって、一時期、その評価について論争があったこともあったが、現代でも依然として高い人気を保ち続けている。

ところで、現代でも誰もが一度は読んだことがあるであろう有名な「雨ニモマケズ」、実は日の目を見たのは偶然でもあった。賢治が亡くなった翌年の昭和9年2月16日、賢治を慕う人々が東京で「宮沢賢治友の会」を開催したことがあった。この会合に招かれたのが賢治の弟である宮沢清六である。彼は賢治が使っていた大きな革製のトランクを持参したのだが、ある参加者がそのトランクのポケットに手帳があるのを見つけたという。これが「雨ニモマケズ手帳」であり、こうして賢治を有名

にする「雨ニモマケズ」という作品が世に出ることになったのである。

「雨ニモマケズ」は、そのような経緯もあり、賢治の死後に知られるようになったものだが、病床にあった時に出版された作品に触れておかななくてはならないだろう。まさに「雨ニモマケズ」であるような自己犠牲の精神が、科学的知識と共に前面に出た童話「グスコブドリの伝記」である。

(8)

賢治の作品で、生前に世に出たものは少ない。その数少ない作品の一つが「グスコブドリの伝記」である。もともと、10年以上も前から原型となる「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」という作品が書かれていたが、昭和6年頃になって、ストーリーがほぼ同じ「グスコブドリの伝記」(*)として完成させていた。10年もかけて作品を書き換えていったのは、いかにも賢治らしい。

この作品では、日照りや冷害が続いて親を亡くした主人公のブドリが、農家の手伝いをするという設定で、農作物がいかに天候不順の影響を受けるかをまず描いている。そして、本で勉強しながら、少しでも農家を助けようとするブドリの姿勢が現れ始める。その後、本の中で最も興味を持ったクーボー博士のもとへと向かう。イーハトーブに到着したブドリは博士に紹介され、できたばかりの火山観測所に助手として採用される。その後、次第に知識を得て、ブドリは観測所になくはないスタッフに成長する。火山の爆発の危険性を察知し、被害を食い止めるために火山の脇に人工的な穴を開け、町の方へ溶岩が流れないようにすることに成功したりするエピソードが描かれる。終盤、ブドリの両親の命を奪った冷害の足音が再び忍び寄ってくる。そしてブドリは決心する。自らを犠牲にして、村や農民を守るのだと。そして最終的に火山を人工的に爆発させ、大量の火山ガスを放出させて、温暖化によって冷害を止めるのである。

火山に関する的確な理解や、二酸化炭素の放出による大気の温暖化など、当時の最新の知識が作品に織り込まれているのは舌を巻くしかない。最後の火山をカルボナード島としているが、これも炭素＝カルบอนを元にした名前だろう。火山観測所の職員を主人公とするあたりは、理科少年であった賢治が科学者にあこがれていた証拠でもあるが、彼の根底にあるのは科学的な興味だけでなく、むしろ成果を社会に還元するという視点だったといえるだろう。

苦しむ農民を助けるべく、肥料設計に東奔西走した賢治の姿と、本作品でのブドリの姿は重なるものがある。この自己犠牲は、賢治が「銀河鉄道の夜」にも織り込んだ彼の作品の根幹をなす精神性である。「雨ニモマケズ」にも描かれる賢治独特の自己犠牲の精神が、当時の最新の科学的知識と結びついて端的に表された作品なのである。

ただ、ひとつ気になるのは、書き換えられる前の作品に比べると、最後があまりにあっさりと終わっていることだ。どちらが良い悪いではないが、どこか書き急いでいる印象をぬぐえない。ブドリがカルボナード島に向かって、ハッピーエンドになるまでたったの6行しかないのだ。これほどあっさりとして終わってしまうと、どこか物足りなささを感じるほどだ。もしかすると、そこには死が迫る賢治の焦りがあったのかもしれない。この童話が「児童文学」第二号に掲載され、世に出たのは昭和7年3月。賢治が病床に倒れ、一年以上経過してからである。作品を仕上げた時期は、ちょうど賢治が「雨ニモマケズ」を手帳に書いた前後である。当然ながら自らの死を見つめていた時期だ。自らの作品を少しでも世に残したい気持ちが先立ったのだろうか。あるいは編集者から何度か書き直しを求められたが、病床ではあまり対応できず、このようにあっさりとした形になったのだろうか。

その一方で、別の考え方も成り立つ。火山観測所でのブドリに、賢治はあきらかに自分を重ねていたことは確かだ。賢治が持つ自己犠牲の精神は、教師を辞め、実家を飛び出して下根子の家で、農家への肥料指導を始めた羅須地人協会時代のことを考えても理解できる。ほとんど代償も受け取らずに、肥料指導に走り回り、拳げ句の果てに倒れてしまった。同じことを、技師となった東北採石工場

に務める中で、売り込みに走り回り、重い壁材のサンプルをもって、上京し、挙げ句の果てに倒れてしまったことから覗える。そんな自己犠牲の精神が、「グスコブドリの伝記」にも如実に表れている。最後に自ら犠牲となって、火山を爆発させ、二酸化炭素を放出し、冷害を防いだラストシーンこそ、まさに病床にあった賢治が、その想像上で自らの理想の形を追求したものだ。その理想は決して実現可能ではなかったし、現在の技術を持ってしても人工的に火山を爆発させることは難しい。それでも、現在の言葉で言えば「人工気象」を実現して、冷害を食い止め、農家を豊かにしようとしている。賢治の思いは「グスコブドリの伝記」に結実している。ただ、あまりにも自らの理想を書きすぎてしまったために、一種の恥ずかしさもあって、賢治は最終シーンをあまりにもあっさり終わらせてしまったのではなからうか。いずれにしろ、今となってはその真実はわからない。

「グスコブドリの伝記」のように、科学的知識と賢治の精神性が昇華された代表作が「銀河鉄道之夜」である。

*：「グスコブドリの伝記」の下書稿と言われる。成立年代については大正時代末頃という説もある。